



田崎亮平（1988-）初個展である。今年2月のグループ展「on the steps」では自ら生み出した樹脂をおろし金と蒸し器に貼り付けた立体を出品した。私は「人工物と鉱物の出会いと離別を、これからどのように展開するのか」と評した。今回田崎はギャラリー内に樹脂を貼り付けたインスタレーションを1点、事務所に小品6点を展示し、新たな展開を見せた。

ギャラリー内のインスタレーションは《欲望の展覧会》と題され、壁面に1×2m四方内に宝石を型にして田崎が制作した樹脂を3000個貼り付けたものだ。よく見ると樹脂は床にも零れている。

見る角度によって樹脂が反射する光の角度が異なり、様々な表情を浮かべていく。正面性が存在せず、僅かな視線の動作に対応する樹脂の壁は、確かにインスタレーションとして機能している。

しかし何故この大きさなのか、何故3000個なのか、貼ることに生まれる壁の隙間にどのような効果が存在するのかといった、綿密な計画性というよりもむしろ、作品として意義が弱い。

つまりインスタレーションの奥底に存在する、主張が透けて見えてこないのだ。確かに「欲望の展覧会」を表そうとしてはいるのだが、宝石の形では短絡過ぎる。

それは壁面を覆うことも同様だ。絵画とポスターの違いは、壁面に絵画は「架ける」のだが、ポスターは「貼る」。絵画を「掛ける」としても良いかも知れないが、「架ける」が持つ、作者の思想と見る者の存在を架け渡す意義を私は重視する。

彫刻を壁に架けてもいいし、これはインスタレーションなのだから壁面に展開してもいいのではないかと主張することも可能だ。ならば床でも天井でもいいのではないだろうか。何故、壁なのか。

零れ落ちる樹脂にも問いが残る。これだけ堅固に構築した画面の意味が削がれてしまう。物語が生まれてしまい、感傷的な装飾に陥ってしまうのだ。矢代幸雄が日本美術の特質は装飾にあると語ったような、田崎の意図と異なる見解が示されてしまうことに危惧を感じるのだ。

空間はフラットな存在ではない。ヒトラーがホワイト・キューブを好んだような発想ではなく、田崎には、物質と物質との間に隠された空間性を浮き彫りにするという大きな課題が、今回の展覧会で齎されてきたのである。

